欧 米 の 印 象

奥 平 志づ江

1．は じ め に

昨年秋の旅行は、僅か3週間足らずの短期間ではあったが、私の一生にとって最初の最も感激に満ちた、大エヴェントであった。
というのは、それまで、わずかな余暇を見つけ財布の底をのぞきながら、ほゞ計画的に、おらが国さの見知らぬところ、心ひかれる風物を求めて、せいぜい1週間足らずの旅を時折り楽しんできた私にとって、それは、その2．3ヶ月前まで思いもよらない突然の出来ごとであったからである。又日頃「おのが国を知らずして、何のとつ国ぞや」と多少ひがんでいた手前、一足とびに地球を一囲りすることは、大きく志を変えたことにもなる。
もっとも、つい最近まで、アメリカの西海岸まで半月もかゝっていたことを思えば、お金と暇からいって、通常のサラリーマンの到底なしうることではなかったし、海外旅行は富めるアメリカ人や、ごく一部の社用族、公用族等の特権のように考えられていた。それが我々庶民階級にも、さ程無理なく実行されるようになったことは、まさに高度経済成長による余剰外貨（円の強さ）、 交通機関の急速な発展等に尻押しされたわけであらうが、良い悪いは別として、時代の移り変りを今更のように思い知らされたわけである。

2．モ ス ク ワ へ

11時15分に羽田をとび立って30分後に佐渡ヶ島の上空、つかの間に日本海を飛びこえ、アムール河を眼下に、シベリア上空を高度約8000mで西へ西へと太陽を追って直進、やがてバイカル湖を左に、月の表面を想わせる無数のなだらかな、びょうぼうたる高原が果しなく続く。こんなに大勢の人を長時間閉じこめて浮んでいる巨大な金属の塊。不安と諦めと好奇心を胸に秘めて静かに眼をつぶる人、それを紛らわすように談笑するもの、いつも笑みをたたえてかいがいしく食べ物や飲み物を運んで世話をする美しいスチュワーデス、みんな同じ運命に結ばれた家族のような気がする。二度の機内食（何れも昼食か）をすましても未だ明るい。あまりにも広大なユーラシア大陸にうんざりしていると「間もなくモスクワ空港に着陸」の放送にほっとした気持で地上の風景に見入る。なんと11時間もの長い空の旅であった。大きさのわりに閑散としたシェレメチェボ空港は半ば点滅する暗い蛍光灯と、やたらに多い軍服姿が印象に残る。予約不能で政府による宿舎の割当てがきまるまで2時間程待たされて、ごついタクシーでホテルに辿りついたのは夕刻の6時頃（日本時間翌日午前1時頃）であった。すべてが国の統制を受けている割合いに、大きくのんびりしたこの国の人々には何か対象的なものを感じる。10月中旬だが、人々の服装は日本の真冬なみ、道巾の広さ、右側通行、地下鉄（メトロ）の入口の標識、モータースイパーで

道路を清掃する大きなトラック、電車のようにつながったトロリーバス、街頭でアイスクリームを食べる人の意外に多いこと等が目につく。機内で2回、都合4度目の食事はホテルのレストランシアターで。素晴らしい音楽と豪華な雰囲気、大きな料理で今までの疲労と緊張感が和らいだ。

社会主義の国にしては、チップは当り前、煙草の立ち売り、方々の国のコインを混ぜた釣銭等おかしな感じだが、これも外貨獲得のため（ルーブル持出しは厳しい）の国の黙認政策かと考えなをした。又この国には何と英語を話す人の少いことか、とに角外国語を話す人は階級も上らしく、旅行案内所でのバスガイドさんの言うことは大の男どもがヘイヘイの態。市内撮影ＯＫと聞いて観光バス（乗客は殆んどアメリカ人とみた）の中から川越しに金色さんぜんたるクレムリン寺院の遠景を撮ろうとしたら、ガイド嬢から自分の説明を聞けとのお叱りを受けた。

巨大なクレムリンの城壁、赤い星の尖塔、赤の広場等の見事な色彩的調和、モスクワホテル、ボリショイ劇場、その他数々の帝政ロシア時代を偲ばせる華麗な建築美には見る人の目を奪うものがある。モスクワ大学は広大な緑の公園の中にそびえ立つ、中央は34階、両側17階の美しい建物で授業料は無料、学生の80％は国より奨学金を受け、修業年限は文科系が5年、理工科系が5年半と聞く。レーニンの丘からモスクワ川越しに眺めるモスクワの全景は素晴らしい。

3．ロ　ン　ド　ン

朝早く宿舎のマウント・ロイヤルホテルを出て程近いハイド・パークを散歩したら騎馬姿の貴婦人を見ることが出来た。大都会の中にこんな広々とした、閑静な公園があるのは全く羨ましい。お定まりの観光コースであるバッキンガム宮殿へ、名物の衛兵交代は想像以上の華麗なもので、まるでお伽の国のオモチャの兵隊の感じ、見物人が多くて、人垣の頭越しに撮った8ミリには鮮かに写っていた。

婦人の騎馬警官の美しい姿が印象に残る。形式と伝統を重んずる英国民気質には感銘を深くした。数々の残虐な歴史を思い起させるロンドン塔、その中に飾られた多くの宝物には只唖然とするばかり、昔ながらの赤いガウンの警備員と死肉を食べて太ったといわれる黒いカラスのコントラスト、テームズ河に開いた水門から塔内の地下牢に通ずる濠、建物の古さ（約900年）等数多くの囚人の苦しみを偲ばせる暗いイメージを与えるものばかり。こゝからウエストミンスター橋を隔てて斜め対岸の美しい森の木立ちの中に聳えるウエストミンスター寺院、真暗い室内の遙か上の天井窓に見えるステンドグラスの精朽な美、通路の足下に刻まれた歴史上の有名人のブロンズの墓碑等には感嘆と奇異感が交錯する。
ビクトリア駅から夜行寝台車の国際列車ナイトフェリーでドーバー海峡を渡りパリーへ。

4．パ　リ　ー

マロニエの落葉の中からその実を拾い歩いたシャンゼリーゼの通り、マリヤ・アントワ

ネットが処刑されたというコンコルド広場の尖塔から巨大な凱旋門まで一直線の広い美しい通りはよその国では見当らない。世界のファッションセンターといわれる商店の装飾の美しさに惹かれて、夜は再度ウインド・ショッピングを楽しんだ。ルーブル美術館の広さと陳列品の多さは、さすが美術のメッカを思わせる。ミロのビーナスとミレーの晩鐘など、やはりオリヂナルの美しさはコピーの比ではない。モンマルトの丘を頂点として、道の両側の凹みを利用して、きまった時間に水が流れ出し、パリー全市のゴミを清掃しているアイデアには感心させられた。サクレ・クール寺院から眺める街の景色も素晴らしい。噂に聞いたとおり丘の上の広場には何と世界中から集まったと見える画家の多いこと、日本人も数人、皆絵具をたっぷりつけて筆を振っているが、群がる人の多いわりに余り買う人がいないのは、荷物になることを気にするせいだろうか？　モスクワ、ロンドンまでは、或る好奇心と物珍しさで大形の西洋料理を楽しんでいたが、パリーまで来るといささか飽食気味となり、夜のオペラ通りを日本料理店を探し歩くこともあった。セーヌ河の中州、シテ島に聳えるノートルダム寺院は、この国随一の宗教建築といわれるだけあって外観もさることながら内部の彫刻、ステンドグラス等素晴しさは格別である。

5．ヴェルサイユ

中世のフランス王族の栄華の跡を偲ばせるヴェルサイユ宮殿の華麗さには感動させられた。ことに内部一面の壁画と庭園、マリヤアントワネットの幼少の頃の住居まで通ずる運河等、宏大な領域にわたる芸術的な造園設計は見る人の心を深く打つものがある。

6．スイスへ

ヴェルサイユ以外は殆んど都市の名物観光ばかりに明けくれた私にとって、汽車の旅行は心温まるものであった。片側通路のゆったりしたコンパートメントの車窓から眺めるフランスの牧歌的田園風景はまたすばらしい。緑の丘陵を背景に点在する小綺麗な民家と教会の尖塔、青空を写した湖と川、広々とした野原に草を喰む牛の群等の素晴しい調和に時のたつのも忘れる程見とれることもあった。

7．ジュネーブ

フランスとスイスの風景の相異は余り見出せない、花と緑と建物のカラフルなコントラストはヨーロッパ全体に共通する美しさで、強いていえば、スイスの特徴は山と湖の多いことであらうか？　永世中立国だけあって、ジュネーブの街には世界保健機構（ＷＨＯ）国際赤十字本部（ＩＲＣ）国際労働事務局（ＩＬＯ）等何と国際機関の多いことか。レマン湖に映るアルプスの山々はまるで絵をみるような感じ　日本の都会ほどではないがジュネーブの夜景はネオンとイルミネーションに彩られて明るく美しい。

8．モンブラン

ジュネーブ市に接する国境の検問所で一時停車、簡単な問答だけでパスして再びフランス領を時速150粁位で車をとばし、刻々と迫る山あいを通り約1時間程でモンブラン山麓の町シャモニーに着く。ロープウェーで殆んど垂直な岩壁を上昇しながら眺める青白い氷河と太陽に白く輝くモンブランの景観には全く威圧された。

9．ローマ

見しらぬ人に混じって寝台車におさまったジュネーブからローマへの夜の旅は心もとなく淋しかった。ムッソリーニ時代に出来たといわれるローマ駅の構えは独特な風格があり映画の「終着駅」の場面を思い浮べる。ローマは広場と泉と遺跡が実に多い。トレビの泉では人真似で後向きにコインを池になげてみる、そのご利やくは人によって色々と話が異るが、射幸心を利用した金集めの方法を賢い人が考えたのであろう。又街角によく見かける乞食もローマ名物の一つらしい。数多い彫刻、絵画、建築の素晴らしさはミケランジェロ、レオナルドダビンチ等の偉大な芸術家を生んだイタリヤ人の優秀さを物語るものであらうが、反面現代ローマ人は、これらの芸術作品と遺跡に頼って生きているようにも見える。個人的には人なつっこくて血の気が多い南欧人特有の人が多いと見たが、交通整理の行われていない繁華な通りで、事故もなく、何とか車がはけているのは、日本人より気が長いのかな。コロッセオ（斗牛場跡）カラカラ浴場、カタコンベ(巨大な地下墓地)、古代ローマの遺跡など華かな当時のローマ文化を物語るものが到るところにあり、西洋史を勉強するには恰好の所といった感じがする。ヴァチカンの法王庁に見る大理石の像、数多い宗教的芸術作品と壮大な建築物等に、宗教が文化に及ぼす影響の大きさを更めて考えさせられた。

10．ナポリ

ローマから「太陽の道」を約4時間南下して風光明媚なナポリを訪ねて見た。漁師町であるが、日本の漁師町のイメージはなく、古い遺跡、城壁、丘の町並、緑の並木と海岸の調和が美しい。海岸の城跡サンタルチヤでは老人が美声を聞かしてくれたが、みんな歌の好きな顔に見える。狭い通りを隔だててビルの間に夥しい洗濯物が干されているのはここの名物と聞いているが面白い。

11．ポンペイ

ポンペイの遺跡は最も見たいもの丶一つであった。すでに2000年ほどの昔にこれ程の町造りをしたローマ人の偉大さには感心したが、背後に聳えるヴェスヴィオの黒い山影を仰いで、一瞬にしてこれを灰の下に埋めた（紀元79年）大自然の力に、ただただ恐れ入るばかりである。目を閉じると、激しい地揺れと鳴動、降る灰の中を真赤な噴煙に顔を染めて、ひたすら海の方へと逃げまどう当時の市民の光景を想像することが出来る。水道の配管、

水洗便所の跡、民主政治のはしりと思われる政見発表の広場、石畳の道路に残る鉄車の轍(ワダチ)の跡等をみて日本の歴史の新しさをつくづく思い知らされた。

12. ソ レ ン ト

美しいナポリ湾を右にみて、海岸のドライヴウエーを走ると40分位でソレントに着く。ナポリ民謡に謳われるだけあって美しい避暑地である。金と暇が許すなら暫らく此所にとどまって、すぐそこに見えるカプリ島にも行き度いものだと思った。

13. マドリッドへ

上空から見る地中海、イベリア半島も美しい。心なしか機長以下乗務員と若干の乗客が中東アラブか、ユダヤ人に見えてハイジャックを懸念したが杞憂に終った。マドリッドの街も他のヨーロッパの大都市同様に6階建位の平均した建築のベースの上に高層ビルが所所に出ているといった町並みで、こげ茶色と緑のコントラストは似通っている。高層ビルと王宮と小高い公園に三方を囲まれたスペイン広場の噴水を背にしたドンキホーテの像は人を空想の世界に走らす何かを持っているような気がする。マドリッド大学の広大なこと広いテニスコートで遊ぶ男女学生達の恵まれた環境が印象に残る。

14. ト レ ド へ

マドリッドからオリーブ畑と赤土の間の道を約40分ドライブすると中世の都市トレドへ着く、石畳のせまい坂道を駆け昇ってイサベラ女王に長い探険旅行の報告をしたと思われるコロンブズや海賊の往来を想像した。両側の薄暗い石造りの家は皆その頃のものと思われるが、2階の窓から通りを見下ろす別々の家族らしい子供の顔々は貧しさを感じさせる。

15. ニューヨーク

イベリア航空のジャンボ機で大西洋をとぶ。天候のせいで一面の雲海にさえぎられ、大西洋上の風景を楽しむことは出来なかった。ニューヨークの象徴である「自由の女神」とマンハッタンの高層ビルが小さく見えたと思う間もなくケネディ国際空港に到着。ホテルのレストランで見るパンもヨーロッパとはちがって軟かいし、水は注文しなくても出ているといった工合で、すべてが日本に近づいた気易さを感じる。日本料理店も数軒見つかったので、なつかしい一品料理も味わえた。イーストリバーに面した国連ビルの偉容、セントラルパークの広大な自然、エンパイヤステートビルの展望台から見るニューヨークのすばらしい夜景、路面の凍結防止のために道路に施した暖房等さすが世界一の大都市だけあると感心したが、黒いスラム街、ハーレムの不気味さ、夜の五番街の町角にたむろするチンピラ風の若者、束の間の出来ごとであるが車が交又点の信号待ちで停っている間に薄汚い浮浪者が近づいて、路上の汚れた紙で勝手に車のフロントガラスを拭かれて1ドル請求されたことにはニューヨークの別の素顔をみるような気がした。

16. サンフランシスコ

ラガデア空港（国内航空）のＴＷＡ会社の建物と設備のよさと身体検査の厳しさが隣り合わせのケネディ国際空港と比べて逆であることは面白い。北米大陸を東西に横断してみて、ソビエトほどではないが「なるほどアメリカは広い」と感じた。海をみることなく広大な陸地の空をとびつづけ、ロッキー山系、グランドキャニオンの雄大な景観を眼下に過ぎて、ほどなく美しい金門橋とサンフランシスコ湾をみることが出来た。サンフランシスコはニューヨークに比べて大分暖いがホテルのロビーには毛皮のオーバー、アロハ姿、Ｇパン、ドレス、スーツと色とりどりの姿だがお互いに人のことは気にしていない様子。チャイナタウン、ジャパニーズコーナー、日本料理店、日本庭園など、日本に近づいてきたことが判る。金門橋を渡ってオークランドよりバークレへ、ヒッピー族発祥の地だけあって、大学の近くは行き交う人も路上の売り屋もヒッピースタイルの洪水と人種の展覧会、こゝ程自由の雰囲気を感じた所は外にない。サンフランシスコより最終コース、一路日本へ。

途中ハワイで、アメリカ人グループの１人が見えないと言うことで離陸が一時間おくれた。ハワイもアメリカの一州とはいえ、なんと米本土から遠いこと。日付変更線をすぎて忽ち翌日11月４日夜羽田へ。

17. む　す　び

地球を一廻りして感じることは、日本に近づく程風俗習慣も近くなり、一種の親近感、安心感が出てくることである。これは地理的関係位置、交通の便と親交の歴史から考えると隣国が遠くの国より似ていることは至極当然のことであるが極東とヨーロッパにまたがる隣国ソビエトには何か遠いものを感じたのは何故であろうか、政治体制の差であろうか、それとも地理的の広がりか、言葉の違い（通用度）か、人種、環境かと自問自答してみる。交通の発達にともなって服装の流行などは殆んど時と所の違いを見出せないが、アメリカを含めてヨーロッパ人と日本人とでは服装面では毛髪と同様な色の傾向と自主性（個人主義）の相違があることを感じた。しかし、反面、目の色、環境条件等の違いに関わらず基本的な物の考え方は日本人同志よりも近い人がいることもたしかである。これらの親近感、異和感が個人、民族、国家相互の平和を求める手がかりになるのであろうか。それとも人種、国家の相異以上に、個人的性格の差がある限り平和を望むことは困難なことであらうか。旅行を無事に終えて、今までに味わったことのない大いなる安らぎと「決して早すぎることはなかった」という満足感に浸り「国内、国外とも、ほどほどに、こもごも見くらべることの良さ」をつくづく思い直したことであった。又北から南、西から東と動くにつれて意識した風俗習慣、社会環境の相違と`推理した内面的、人間的の相以性は少なからず私に発想の転換を促したものと思うが、まだまだ、欧米人のやうに食事や休息に時間をかけるほどの余裕をもつところまではいかない。時間の許す限り、少しでも多くを見たいと欲張った忙しい旅行であったが、話しや、活字、スクリーンのうえだけでは得られない新しい知識と直接肌に触れた数多くの体験は、有形、無形の貴重な収穫をもたらし、私の価

値観、人間性に大きくプラスしたことはたしかである。また、季節的、体力的にも、それ程無理を感じない（好奇心と緊張感のせいもある）タイムリーなスケジュールであったと考えている。欲をいえば限りのないことだし、若い時ほどその後の人生に益するところは多いとは思うが、この様な便宜と機会をあたえて下さった学園に対し、遅まきながら紙上をかりて御礼を申し上げ本稿を閉じる。